

【大阪の歴史散歩】

泉大津市 田中本陣

大阪から鉄砲の町堺を抜けて、昔はそれこそ白砂青松であったであろう湾岸沿いに集落を辿る道が昔からの紀州街道である。今では新旧26号線、臨海、湾岸線の大動脈が通じ、鉄の町、石油コンビナート、大規模な港が空まで広がって街道は寸断されてしまい、僅かに濱寺公園に松林の名残を残すのみで、幅の狭い街道に昔の面影を偲ぶよすがはない。それでも街道が高石町を過ぎて旧26号線と交叉し、海岸へ近付いて行くと僅かに残った松の木の間にもあまり見掛けない古い大きな門構えの家、泉州独特の二重構造の屋根の町並が見える一帯がある。その丁度中央部の一角にこんもりとし森をなした広大な田中屋敷がある。江戸時代には近隣八ヶ村の大庄屋を務め、紀州藩主の参勤交代の時には殿様の休憩所に当てられていたことから田中本陣と与ばれ、泉大津市では最も有名な史跡の一つとなっている。

田中家は、その祖は清和源氏から出た南朝の新田氏の同族の田中遠江守重景が1570年（元亀元年）に当地助松村に移住したのが初めといわれている。

その後、織田信長の石山本願寺攻めに参加、戦死した後を継いだ子孫の暮した屋敷である。その後紀州藩専用の本陣として修築されたが、何度か手を加えられて現在に至っている。

建物は街道に面して正門（長屋門 写真参照）東向きに主屋、土蔵、納屋があり、古い豪農の面影を留めている。何度か増改築されたようであるが、江戸時代初期の建築技法を残しているといわれている。寛政年間には凶作に備えて八ヶ村の貯穀倉（備窮倉）が建てられており、大庄屋として農民の安寧を護る使命と責任を果たしていたのであろう。

本陣の東南約100mに一見古墳のような外観の田中累代の墓所牛滝塚がある。塚内には和泉33所霊場第15番札所海蔵寺の跡がある。また、本陣の東南約2kmには池上・曽根遺跡があり、隣接して大阪府立弥生文化博物館がある。このあたりは弥生時代より拓けた大農耕地帯であったことがしのばれる。

